

ICT ダンス授業支援の試み

熊谷佳代（岐阜大学）

1. はじめに

本研究は、2017年度に筆者（岐阜大学）とソフトバンクが協力して取り組んだ社会貢献事業である。ICTを活用したダンス授業支援事業の報告の一部である。

事業の概要を示し、ダンス授業支援の内容と実態を検討し、今後のICTを活用したダンス授業支援についての知見を得ることを目的とした。

事業概要

本事業の目的は、①学ぶ機会の地域格差や学校格差の解消②教師の負担・不安の軽減③地域リソースの有効活用である。

岐阜県においては、教員研修や研究会が設定されても、遠方の学校に赴任している教員はなかなか思うように研修に参加できない、小規模校においては授業について相談できる先輩教員に限られているなどの地域格差・学校格差が存在する。そのような場合、教員は仕事を終えた後、片道2時間近くかけて、大学教員（筆者）に相談を受けに行くことなどがよくある。さらに、ダンス（表現運動）の授業となると相談できる教員は限られている。

このような事例は岐阜県に限ったことではなく、他府県においても見られるのではないだろうか。教員の労働環境を改善すること、安心して教材研究できる時間を確保し、自信を持って授業実践に向かえる支援や仕組みが必要である。

ソフトバンクでは、すでに「スマートコーチ」というシステムが構築されており、登録すれば、部活動において外部の専門家（コーチ）に指導を受けることができる。コーチには、トップアスリートも含まれている。本システムは部活動支援を主に稼働しているが、授業支援については初の試みとなる。本事業におけるコーチは、大学教員（筆者）とダンスを専門とする学生（教育学部所属であり、教育実習経験者）とし、地域の人的リソース

を活用すると同時に、大学教員と学生の地域貢献活動にも位置づけた。

2. 支援組織と支援内容

支援組織

主催は、岐阜大学教育学部教員（専門分野：ダンス教育 筆者）とソフトバンク CSR 川那賀一である。川那氏は、教育学部出身者であり、在学中はダンス部に所属していた。社会貢献のあり方について模索するなかで、教員の多忙化の問題とダンスでの社会貢献を自身の取り組むべき課題と捉え、この事業は始まった。

支援対象者（授業実践者）は、S中学校K教諭（男性）、A小学校S教諭（女性）、N小学校であった。教育アドバイザーとして、岐阜市教育研究所の井上誠氏と岐阜県教育委員会の中島昌俊氏に協力を得た。事業運営は、スマートコーチシステム運営費により実施された。

支援内容

支援（サポート）の大まかなステップは、単元前に授業設計のサポート→単元が進行している間は、技術・指導のサポート（踊り方やコツを中心に）→単元後半や終了後は評価（ダンスの動きを見る視点や評価方法）のサポートである。具体的な内容と流れは、以下の通りである。

①授業中、ICT（学校のタブレット）を活用しダンスの動画を生徒や教師が撮影する。授業後、速やかに教師がスマートコーチ上に質問も含めて撮影した動画をアップする。

②コーチ（学生と大学教員）はそれらを確認し、あらかじめ設けられた評価規準*を参考にダンス動画と質問に対してコメントをする。

③教諭はコーチからコメントバックされた内容を参考とし、自身の指導や生徒の評価に活用する。

*単元を通して身につけたい力や目指す動きをコーチは事前に共通理解する。



写真1 動画を添削し、コメントを録音する学生



写真2 コメントを図示



写真3 コメントバックされた内容を生徒に説明

3. 成果と課題

教師の負担・不安の軽減 (他の成果については割愛)

先行研究¹⁾を参考に教師のダンス指導不安について、支援(授業実践)の前後で変化するのか、3名の対象者に調査を行った。調査項目は、以下の4項目である。

- (1) 児童生徒の授業参加や動機づけ、授業構成に対する不安
- (2) 教師自身の知識に関する不安
- (3) 教師自身のダンス技術に対する不安
- (4) 児童生徒のレベルやニーズに対する不安

結果、支援後は不安が軽減していた。(表1)* 経験により自信を得たことも考えられるが、支援

内容が大きく影響していたと推測される。

指導不安	S中学校		A小学校		N小学校	
	支援前	支援後	支援前	支援後	支援前	支援後
1.動機づけ、授業構成	7	2	7	3	7	6
2.教員の知識	8	2	8	4	8	5
3.教員のダンス技術	8	3	7	4	6	4
4.児童生徒のレベル・ニーズ	8	2	4	3	8	5

*1～10で回答。不安が大きいかほど大きな数字を示す

以下は、2名の教諭の振り返りの一部である。

S中学校K教諭

- ・不安はまだ少しあるけど、(研究発表に向けて)やっつけていける気がします。
- ・作品発表会の評価方法も教えてもらったので授業で生徒に教える内容も分かりました。
- ・前期のクラスは一つだけ完成度が高かったです。そこにはダンス経験者がいて、その子が色々な知識や技能を持っていたからです。でも、後期(今回)は自分も色々な知識が学べたので、前期よりもたくさんアドバイスができました。質問にも答えられました。
- ・自分でもインターネットや本でダンスのことを調べるようにもなりました。音楽番組でダンスを観る視点も変わったと思います。

A小学校S教諭

- ・授業を重ねるごとに不安感は小さくなりました。最後の時間(交流会)の展開を迷っていたので、アドバイスをいただけてとても参考になりました。
- ・毎時間丁寧にコメントいただき次時に生かすことができました。導入の工夫や変化の観点、具体的な言葉のかけ方を教えていただいたので、それを実践することができましたし、自分の中でも観点やポイントを少し整理できたように思います。
- ・自分では気づいていなかった子どもたちの動きの良さや、弱さ、私自身の課題を教えていただいたので、それを元に指導を考えることができました。

課題

教員のダンス授業に対する不安感や負担感に対して、教員が抱えている課題を焦点化し知識を整理することで、遠隔でもサポートできたと考えるが、システムの利点である動画を用いた指導をもっと有効的に使うことでさらに効果が期待できる。しかし、システム使用料の発生に対する課題が残された。

参考文献:1)山口莉奈・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子(2017) 体育科教員のダンス指導不安の探索的研究, 日本教育工学会論文誌, J-STAGE Advance published DOI:10.15077//jjet.40117